

十一 沈黙のアルバム

戸棚の隅に

教員時代のアルバムが何冊か眠っている

時々思い出したように僕に呼び掛けてくる

昔僕のクラスに舞姫がいた

踊りが好きで

毎日の歩みは蝶が舞うようだった

美しい動きを作り出すのが

好きでたまらぬという表情で

通学していた

少ししゃくれた顎が笑顔とともに

可愛い舞姫だった

舞の魔法の虜になり

友人の女の子達が

お嫁さんになろうが

どうなろうが

自分の周りを舞の花で満たす以外に

生きる道はないと信じた顔つきだった

「良いのかい」 僕は何度か聞いた

当然だという眼差しがいつも返ってきた

自分にそっくりな

小さな舞姫が舞う舞台を

無数に生み出す夢を見始めたのだろう

やがてお嫁さんのイメージは

僕の頭から遠ざかっていった

「これで良いのだ」と言うものを

見つけてしまった時

人間は最も美しく輝き出す

僕は彼女自身と、彼女の分身とに

完全に寄り切られてしまったのを知る

彼女のお嫁さん姿を

僕は諦めてしまった

そしてある夜の事

僕に、天使からの電話がかかってきた

「先生私結婚しました」という声が

天から突如降ってきたのだ

舞姫が伴侶を得た。

僕は耳を疑った

明日顔を見てもらいに行きます

僕はもう一度耳を疑った

僕はまだ生きていて

こんな朗報が舞い込むなんて

僕には無上の喜びだ

舞姫が

舞の美を受け継ぐ

幼い天使たちをたくさん生み出し

それを静かに力強く見守ってくれる

大切な、大切な伴侶が現れたのだ

自分の娘の輝かしい幸せに遭遇したように

僕の心臓は跳ね上がっている

「M、よかったな」と

眠りに落ちる前に

何度つぶやいたか知らない

彼女の幸せが

僕の幸せに重なる瞬間を

今じっと待っている

おめでとう、Mちゃん

本当におめでとう

よかったね、Mちゃん

ご主人、どうか一緒に歩いてあげてください

良い人です

きっとあなたの人生も

嬉しさに満たされているでしょう

二人で二人を創りあい

二人で二人の道を行んでください

僕の過去には

こんな願いのアルバムが、

積み重なって来た

どうしているのかな

戸棚の無言のアルバムは

声も出さず

重なって閉じたままだ

(二〇一二年一月二〇日作成、二〇二〇年五月一七日修正)